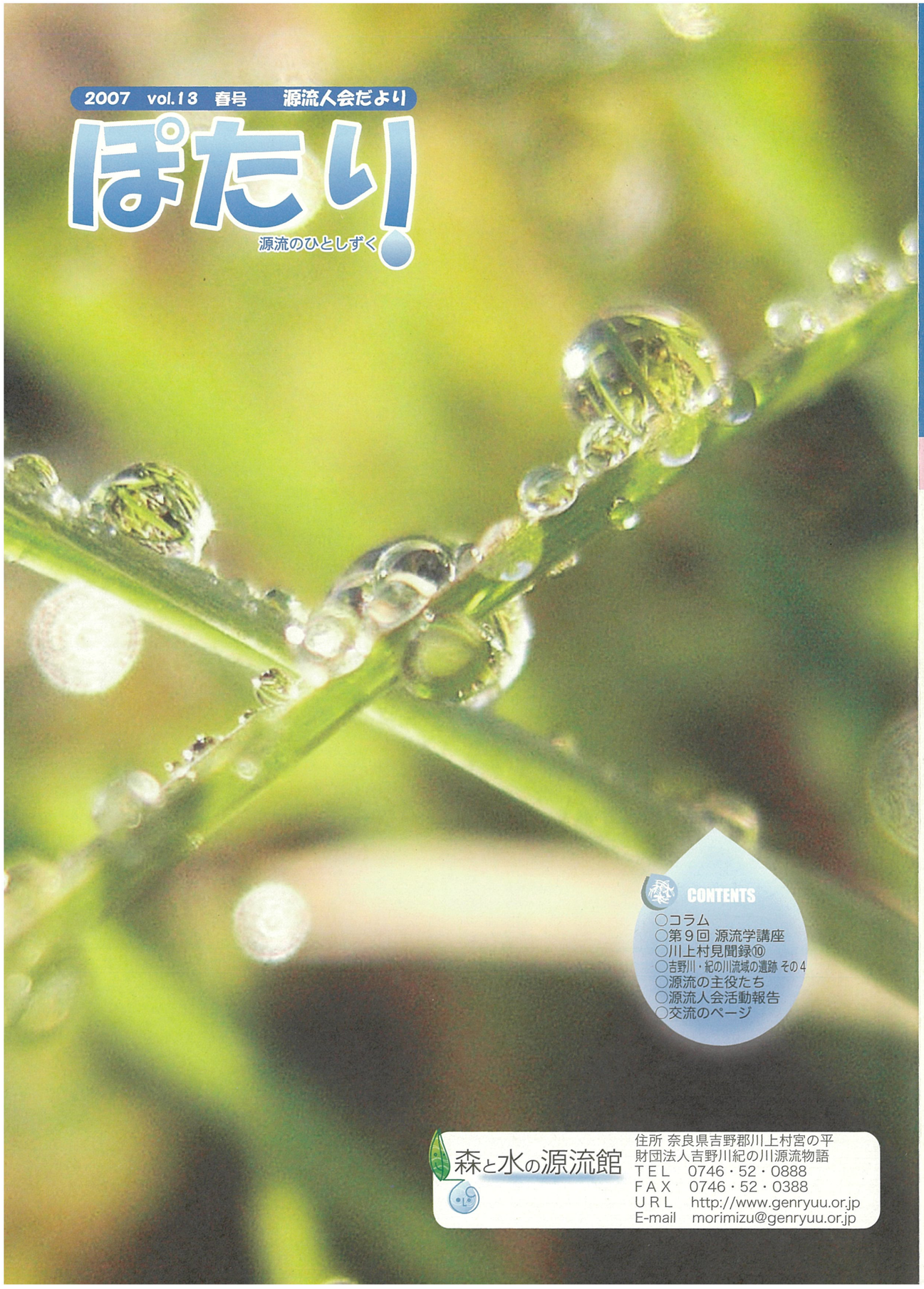
2007 vol.13 春号 源流人会だより

ぽたり!

源流のひとしずく



CONTENTS

○コラム
○第９回 源流学講座
○川上村見聞録⑩
○吉野川・紀の川流域の遺跡 その４
○源流の主役たち
○源流人会活動報告
○交流のページ

森と水の源流館
住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL http://www.genryuu.or.jp
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

ぽたり

源流のひとしずく

春 第13号

ぽたり 源流のひとしずく 第13号 発行日■平成19年4月発行
発行所■財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館 TEL 0746・52・0888

図1. コダマゴケ（タチヒダゴケ）：樹幹にひっそりっと着いていました
図2. タマゴケ：胞子体のさくの部分が目玉の親父にそっくりで人気者に
図3. ハリガネゴケ：都市部に出てくる普通種なのに最後の最後でお出ましに
図4. トヤマシノブゴケ：地面にマットを作っていました

源流人会活動報告

源流塾「身近なコケの観察会」

3月24日（土）

川上村西河の蜻蛉の滝周辺で身近に見られるものを中心にコケを観察しました。参加者は7名。身近なものとはいってもそこは川上村、午後1時半から4時半までの3時間ほどで数えてみると60種は観察していました。ということで、当日見られたコケをちょっとだけ紹介します。蜻蛉の滝へお立ち寄りの際のお楽しみの一つとして探してみてくださいね。

▲ 図2

▲ 図1

▲ 図4

▲ 図3

源流塾「水源地の森の巨樹に会いに行こう」

3月25日（日）

水源地の森の奥の住人、巨樹たちに会いに行ってきました。参加者は10名。水源地の森を守っていくにはまず、源流人会のメンバーが森を知ることから。少しきついコースでしたが、存分に水源地の森のすばらしさを体感しました。途中でそれぞれの分野の専門家からの自然解説もあり、頭の方も、体の方も目一杯に使った一日でした。

▲ カツラの中に入ってみました

▲ ブナの大木

交流のページ

水源地の森とわたし～Deep Ecologyワークショップに参加して

原稿をひきうけたものの、文章を書くことが苦手でワークショップの詳しい内容は森と水の源流館のマックに聞いてください。（笑）

偶然みつけた森と水の源流館のHPにひかれて、源流館の企画に参加したのが2年前。やさしく受け入れてくれた水源地の森としっかりご縁ができて、名古屋から通うことになりました。

2月10～11日に1年ぶりに源流館のイベント「Deep ecology」に参加しました。講師はインタープリター講座でもお世話になった、岡本工介さんこと、こうちゃん。こうちゃんの企画であれば前回の経験から、期待大（！）ということで迷わず参加決定！

普段の水源地の森へ入るコースでも、水源地の森の魅力は体験できますが、今回のワークショップでは、特に歩きまわるでもなく、水源地の森との一体感をとても体感することができました。自分の気に入った場所で、ゆっくりと水源地の森を感じる・・・。素敵な時間をたくさん持つことができました。

最後に参加したメンバーのそれぞれの気持ちをシェアリングすると、水源地の森でそれぞれに体感した気持ちを共有できて、参加メンバーの気持ちがとても近くなりました。なんだか参加した素敵な気持ちが、文面にはうまいこと反映されません（すみません）これはぜひとも今後の源流館の企画に参加してくださいね。ひょっこり名古屋から私もでかけたいと思います。

追伸：教えてもらった、フォックスウォークは現在ノラ猫相手に特訓（？）中です。フォックスウォークが何なのかわからない方はやはり、森と水の源流館できいてください・・・。

会員No.181「ゆっきぃ～」より

源流人募集！

源流人とはかけがえのない水を生む源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り、育ててゆこうとする会です

ともに源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費		
	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

PRINTED WITH SOYINK™
大豆油系インキを使用しています

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学４年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替

00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

川上村・吉野川源流の自然を紹介するページです。

第3回 源流の主役たち

吉野川源流のナガレタゴガエル（その1）

井手 泉
（☆通称 ヒゲじい：奈良教育大学附属自然環境教育センター協力研究員・源流人会会員）

●はじめに

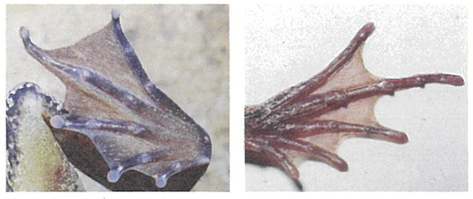
清冽な流れと豊かな森がなくては生きられないナガレタゴガエル。今回の源流の主役はナガレタゴガエルです。そんなカエルは見たことも聞いたこともないという人が多いかと思いますので、はじめにナガレタゴガエルの概要を簡単に紹介します。

このカエルは1990年にアカガエル科の新種として記載され、日本ばかりでなく世界的にみても珍しい、真の渓流性のアカガエルとされています（前田・松井 1999）。タゴガエルに似ていますが、からだつきがスマート（写真1）で、みずかきの発達がよいことで区別できます（写真2）。体長約40～60ミリ、メスの方が大きくなります。本種は関東から近畿にかけての、低山地～山地の限られた地域に断続的に分布していますが、近畿地方での分布は情報が少なく、近年になって少しずつ新たな情報が増えています。

▲ 写真1 上：ナガレタゴガエル（オス）
下：タゴガエル（オス）
ナガレタゴガエルはタゴガエルに比べてスマートで眼が大きく、口の先の方がやや突出している。

川上村の吉野川源流域でナガレタゴガエルが見つかったのは、伯母谷で1998年に出会ったのが最初です。続いて白倉又谷で2000年7月に、そして三之公の水源地の森で2004年2月に確認されました。さらに上谷でも2006年7月に見つかっています。吉野川水系ではこれまでに4地点で本種の生育が判明したことになります。

ところで、水源地の森では上記とは別途に、筆者はその年の10月末に本種と幸運にも出会いました。実は、それまでは本種を秋に見たことは1度もなかったのです。それだけに筆者にとって興味深い出会いでした。それによってどうにか一通り、四季を通しての本種の生態を垣間見ることができました。そこで、それらについて順次述べたいと思います。



▲ 写真2.
左：ナガレタゴガエル（みずかきが非常によく発達し切れ込みが浅い）
右：タゴガエル（みずかきの発達が悪く切れ込みが深い）

●晩秋から初冬の様子

さて、源流の森で10月に出会ったその個体は、お腹が卵で丸まると太った立派なメスでした（写真3）。同日、もう1匹上流域で出会ったことを同行者が知らせてくれましたが、水中へ逃亡したとのこと。とにかくナガレタゴガエルは晩秋～初冬に林床から渓流へ移動し、水中で冬を越すといわれています。折しも、その時節にタイミングよく出会えたことになります。なお、森と水の源流館のスタッフの話によれば、それから幾日か後に、水底でオスメスの抱接（注）した姿が見られたそうです。それは大変耳寄りな情報だと思いますが、秋期における抱接はよくある現象なのか、そのカップルは、抱接したままで冬を越して産卵したのか、またメスを含むすべての個体が水中で冬眠するのか、などの疑問が残っています。

▲ 写真3
晩秋に渓流の岸で出会ったメスの個体。
腹部が卵で大きくふくらんでいる。

早春の風景 「庚申（こうしん）さん」

私の住んでいる西河地区に、曹洞宗祥雲山徳蔵寺がありその境内の一角に庚申堂があります。三月の庚申（かのえさる）の日に、庚申さんのお祭り行事が行われてきました。最近では三月最終の日曜日に行われています。

小さな頃（今から半世紀近く前？）、庚申の日には寺の下に多くの店屋が並んで、綿菓子、みたらし団子、当てものなどを買うのが楽しみだったのを思い出します。

川上村史には「庚申像は、天王寺・小泉の庚申堂とともに畿内三庚申の二寸七分の金色像と開帳物で、六十年目の庚申の年に開帳物を開帳する。開帳はその年の初庚申日で、古来五日間（今は三日間）法要を営んだが、遠く河内・紀州や奈良・山辺・宇陀・橿原・桜井の庚申信者が殺到、参道には露天が並ぶ。農耕と鎮火、無病息災の守護神として有名。堂内に天明二年（一七八二）以来奉納された多数の絵馬や、猿の縫いぐるみをつるす。」と記されています。その六十年に一度のチャンスが昭和五五年にありました。残念ながら私は見ることができなかったのですが、次回は八八歳のチャンスに掛けています。

今も、村内外の信者さんたちがお参りに来ていますが、昔は本当に多かったことが参道の露天の数で偲ばれます。縫いぐるみの猿を、今もお年寄りが作っています。

▲ サルのぬいぐるみ

▲ 西河庚申青面金剛像

▲ 大般若経転読

▲ 西河庚申

さて、庚申さんのお祭りにはお餅まきが行われます。一石二斗のお餅まきはかなりの賑わいです。本堂の中と外の境内とに分けて、外では櫓（やぐら）を組んで高い場所から餅をまいた覚えもあります。

餅米を購入するために西河の家々を回り、寄附を集めます。十日ほど前からは国道沿いに幟（のぼり）で庚申さんのPRをします。前々日に餅米を水につけておきます。前日には餅つきをし、大きな幟をたてて準備完了です。今では餅つき器ですが、杵でつくのは大変でしたが、みんなでワイワイ、ガヤガヤついたのを覚えています。

準備の間お寺には食事も含めてお世話を掛けます。夜遅くまでお酒を飲んだり、余ったお金（無理矢理余らせた？）で旅行をしたりということで、古き良き時代でした。

現在青年団は無くなり、かつての青年団が「とんぼクラブ」を結成し、「庚申さん」を始め始め区の行事の手伝いをしています。一時期から露天も少なくなり、全く来なくなりました。そのことが寂しくて、時の若者達（？）が立ち上がり、当てもののまねごとを始めました。

▲モチまき用のおモチを用意しているところ

▲ もちまきの様子

かつての悪ガキが六〇歳を前にして心騒がしています。

（坂口泰一）

注）
●青面金剛（しょうめんこんごう）：「道教（中国の宗教の一つ）」では、人の体の中にいる「三尸（さんし）の虫」が「庚申の夜（61日目に巡ってくる日）」に体の中から抜け出て「天帝（てんてい）（道教の最高神）」にその人の悪事を報告し、その報告を聞いた天帝は、その人の寿命を縮めるとされているので、「三尸の虫」が抜け出ないように庚申の夜は眠らずに過ごすという「庚申待ち」の風習が生まれました。
この「三尸の虫」を調伏（きとう）（祈祷）によって悪魔を退治する）するため「青面金剛（しょうめんこんごう）」が祀られるようになりました。
もともと、「青面金剛」とは病気を流行させる鬼神で、「伝尸病（でんしびょう 肺結核）」の治癒を祈る際に祀られていましたが、「三尸（さんし）」と「伝尸（でんし）」が結び付けられて、「庚申待ち」の際にも「青面金剛」が祀られるようになったとされています。
●庚申待ちに祭られる猿：「庚申」の「申」は猿にあたります。「天帝」は仏教の「帝釈天（たいしゃくてん）」に結びつけられており、その結果「帝釈天」の使いである猿が「庚申待ち」にも関係するようになったとされています。
●転読（てんどく）：経典（きょうてん）をパラパラとめくり、経題（きょうだい）や経典の初・中・終の数行だけを読むこと。

源流学講座

第九回 山小屋づくり

川上生まれ川上育ちの達っちゃん（辻谷達雄館長）は、50年以上の山仕事のベテラン。その長い人生の経験から、自然とともに生きる力や知恵などを笑いのエッセンスを加えてお届けします。

山小屋も一応寝られるところまで出来上がったが、生活するための一番大事な風呂、便所が残っている。今回は便所を建てることにした。第九回で“クサイ”話しになるが、ご勘弁を願いたい。ハハハ・・・

昔から便所のことをセンチ、カワヤ、チョウズ、ゴクジョウなど、いろいろな呼び方で呼んでいた。わしらが子どもの頃はセンチとよく呼んでいた。学校へ行くようになって便所というようになった。戦後（昭和二〇年）からはトイレとかW.C.といった言葉で言うようになった。いずれにしろ生物の排泄作用は生きていくための必要不可欠の生理行為であり、人間といえどもそれらの生物の中の一体であり、ただ他の生物との処理の仕方が違うだけである。とはいっても建物のない山の中での処理は他の動物と何ら変わりはない。山の中で処理することを「野グソ」、「高麗参り」、「勘定に行く」、「裁判所に行く」などと言った。自慢じゃないが、わしは野グソの経験は豊富である。世の中にこれくらい気持ちの良い排出はない。何よりも広々とした自然の中で静かに鳥の声を聞きながらの一時を味わえるのは自然と共生する山男の特権ですな。ハハハ・・・

さて、今回の便所はどんな呼び方が（えんやろにゃ）とみんなと相談の結果、山小屋風に「カワヤ」と呼ぶことにした。山小屋に対してのカワヤを建てる位置が問題であったが、そこは二〇年位前、当時、山仕事に入っていた人が建てた跡があったので、迷わずその場所に建てることにした。

昔の家の便所の位置はほとんど家の外に建っていた。わしの家も外であった。昔から家を建てるとき鬼門（北東の方角）は不吉とされ、物を建てたりせず、常にきれいにしておくことと親から言い聞かされていた。表鬼門、裏鬼門とあって、わしは今でも心得ている。川上村も二十数年前まではほとんどの家がポッタン便所であった。わしの家では、全部、畑に肥料として施していた。今は村の中もほとんどの家が水洗便所になっている。野菜造りも化学肥料に替わってしまった。

さて、山小屋の「カワヤ」も、どんな風に（するかにゃ？）と迷った。昔のわしらの宿としていた山小屋は簡単で、穴を掘って、四本の柱を立て屋根とカベを杉皮でふいて丸木で床を作り（センチの扉で一枚ぎり）、便所の出入口は一ヶ所だけ、筵（むしろ）を一枚ぶら下げていた入口もあった。水分は地下に染み込んでしまうので、仕事が終わって変えるときは土を上からかぶせて終わりであった。

しかし今は、水源地の村であるという自覚から、管理棟の便所は挽き粉（こ）で攪拌（かくはん）し、バクテリアで処理するバイオマス方式のトイレである。電気が来ているので幸いしているが、「源流のやど」には電気がないので、手動で処理する方法を考えてみた。しかし、名案が浮かばず、結局、挽き粉を振り掛けて処理することにした。

作業工程は、まず穴を掘って、四方に柱を立て、次に屋根の骨組みをする。カワヤの屋根は写真のように片屋根といって、棟木を使わず一方にだけ雨水を落とす屋根である。屋根の骨組みが出来上がると、次は三方のカベのスキを柱と柱に横に打ち付け、そのスキに浪板を張って三方のカベが出来上がる。正面には出入口の扉を取り付ける。最後に厚みの板を乗せたので小錦が乗っても大丈夫である。

扉を取り付けると中は暗くなるので明かりを一ヶ所取ることにした。裏のカベ板に三日月型の穴を切って明かり窓とした。これでカワヤが完成した。用を達した後は必ず挽き粉を掛けることをお忘れなく。

それでは「よう、おきばりやす」。

▲ カワヤの看板！

▲ カワヤ内部

▲ カワヤ全景

●繁殖期のカエルの変貌と静かな繁殖サイト

本種の繁殖がはじまるのは、年明け間もない２月の初旬からです。同じ吉野川水系でも、水域によって少しずつ時期の差があり、気象条件によっても多少の変動がありますが、大体２月初旬～中旬が繁殖のピークと思われます。その時節の渓谷は、立春を過ぎても雪や氷でまだ厳しいのですが、ナガレタゴガエルを観察するには一番よいチャンスです。繁殖サイトになっている流れの緩やかな水域では、あちこちでメスを待ち受けるたくさんのオスが見られ、抱接したカップルも見られます。

ところが、この時期の本種の外見（ひょう）は、いつもとは全く異なって皮膚がブヨブヨに伸び、ダブついて襞（ひだ）ができた異様な形状をしています（写真４）。あのスマートなカエル（写真１）とは別種のようです。これは長い期間を水底で過ごし、皮膚呼吸をするために必要な適応と考えられます。変身の程度や形状には個体差があり、またメスよりもオスの方が明らかに際だっています。川上村の個体群では産卵前のメスの皮膚は伸びてはいてもむしろ張っている様に見えます（写真５）。いずれにしても、繁殖期を過ぎると皮膚は次第に収縮し、やがて元のスマートな体形に戻ります。

繁殖期のもう一つの大きな特徴は、鳴き声が普通のカエルのように聞こえてこないことです。本当は「グググググ」と低く鳴きますし、それでメスを呼び寄せているはずです。ところが水底からの声は指向性も悪く、何より周辺の水流の響きでかき消されて滅多に聞き取れません。また、本種は他の多くのカエルで見られるような、縄張り争いの派手な動きもありません。そのうえ、水底にいるカエルは、流れの水面が絶えず波打っているため、箱めがねがないと見えにくいものです。これら様々な要因が重なるため、ナガレタゴガエルが人の目に入りにくいのだと思います。それでも、注意深く五感と第六感を働かせれば、誰でも本種に出会うことができます。繁殖期以外でも四季を通してそのチャンスはたくさんあります。みなさんも源流の主役で森の先住者である彼らに敬意を払いながら、静かに観察してみてください。

ナガレタゴガエルについては、産卵の様子の他、色々紹介したいことがありますが、紙面の都合で今回はここまでとし、次回にゆずります。

▲ 写真４
繁殖期のオス（皮膚が伸びてひだができている）

▲ 写真５
産卵前のメス（皮膚の伸びはあってもひだはない）

▲ 繁殖期の産卵場（2006年２月12日）

注）ふつうカエルは体外受精をおこない、オスが背後からメスを抱いてメスの産卵と同時にオスが放精する。このようにオスがメスを抱く現象を抱接と呼ぶ。

（引用文献） 前田 憲男・松井 正文 1999. 日本カエル図鑑．文一総合出版，東京．

吉野川・紀の川流域の遺跡～その4～

歴史担当の成瀬匡章が、吉野川・紀の川流域の遺跡について紹介します。

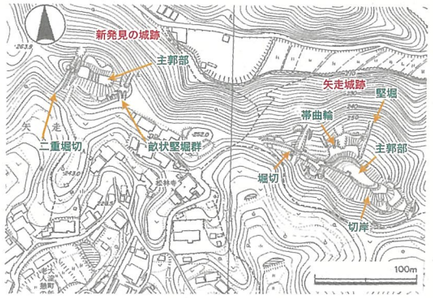
吉野の中世城館 其の2　大淀町矢走（やばせ）城跡

今回は芦原峠を下った大淀町矢走地区に所在する矢走城跡を紹介します。

竜門山地南斜面は、谷が樹枝状に入り組んだ丘陵地帯が広がり、矢走地区はその中に立地しています。城跡がある愛宕山と呼ばれる小山は、矢走地区からはそれほど高い山には見えませんが、谷底からの比高差は約60m、聳（そび）え立つような急斜面になっており防御に適した地形になっています。

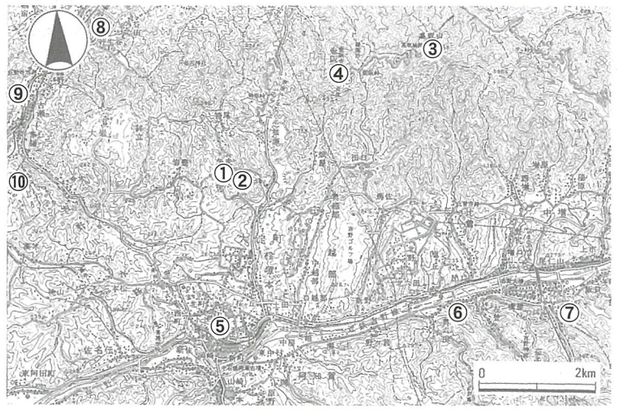
主郭部（城跡の中心の郭）の周囲は、切岸（きりぎし）と呼ばれる急斜面に加工され、周辺には堀切や竪堀（たてぼり）、帯曲輪（おびぐるわ）と呼ばれる防御施設が構築されています。しかし主郭部上は自然地形のままになっています。合戦直前に築城する場合、遮断線（堀切・竪堀・切岸・土塁などの防御施設）の構築を優先させるので、かなり急いで築かれたのかもしれません。

矢走城跡の西側にはもうひとつの城跡があります。これは数年前に発見したもので、矢走城跡より小規模ですが、より進んだ技術を用いています。小規模ながら畝状竪堀群（うねじょうたてぼりぐん）が見られ、背後は二重の堀切で防御しています。畝状竪堀群は戦国時代半ば過ぎごろに用いられた防御施設で、矢走城跡には見られないものです。主郭部上も完全に削平（さくへい）されており、建造物を立てるのも可能になっています。この城跡は矢走城跡の一部とも考えられますが、遺構の時期が異なっているので、それぞれ独立して築かれた可能性があります。



▲　新発見の城跡と矢走城跡

矢走城跡は、奈良盆地と吉野川流域を結ぶ芦原峠越えの街道（国道169号線）を監視するために築かれたとされています。ただ、中世の街道がどのあたりにあったのかは分かりませんが、現在の国道169号線に沿ったものであったとすれば、矢走城跡から直接の監視は地形上不可能で、不自然な占地であるといえます。（註）



▲　遺跡位置図（国土地理院「吉野山」1：50000を縮小

①新発見の城跡　②矢走城跡　③高取城跡　④壺阪寺
⑤下渕城跡　⑥六田城跡　⑦丹治城跡　⑧丹生谷城跡
⑨川合城跡　⑩奉膳城跡

そこで考えられるのは、中世に橿原市・高取町・明日香村一帯を支配下においていた越智氏との関係です。室町幕府とも戦いを交えたこともある越智氏は、戦に敗れると吉野郡内に逃げ込み再起を図っています。その拠点となったのが大淀町下渕と考えられています。

矢走地区は下渕と越智氏の本拠地高取城との中間に位置し、また越智氏勢力圏と考えられている今木～巨勢谷方面に向かうことが出来ます。街道に直接面した場所ではなく、より防御に適した場所を選んで築城し、何年かたって最新の技術で拡張、または新規築城したのも、越智氏が再起を図る拠点の一つしていたからかも知れません。

註）芦原峠周辺には大規模な採石場があるために破壊されてしまっている可能性もありますが、矢走城跡の尾根続きで国道169号線を真下に見下ろせる場所に遺構が見られないことからも、この付近には矢走城跡以外の城は存在していなかったと思われます。

参考文献

藤岡英礼「大和国における越智氏勢力の城館構成」『大和高取城』2001 城郭談話会 大阪

成瀬匡章「大淀町矢走で確認した城跡について」『青陵』112号 2004 奈良県立橿原考古学研究所 奈良

川上村見聞録⑩

*このコーナーでは、民俗担当の黄瀬桂子が村で見たこと聞いたことを「川上村見聞録」として紹介していきます。

「川上村のオカイサン」

大和の茶粥は有名だが、川上村でも茶粥が愛されてきた。弁当持ちで山仕事に行く人は別として、家で食事を取る人の主食は、茶粥。茶粥のことを「オカイサン」という。村の方を訪ねて行って、食事時まで用事が長引くと「姉ちゃん、オカイサン食べていきよ」と思いがけず（ときどき確信犯？）ご馳走にあずかることがある。私の育った滋賀県ではもっぱら白粥ばかりで、川上村に来て初めて出会ったオカイサン。今冬はからずも入院することがあったが、出された病院食の白粥を食べて我ながらビックリ、体調が悪いとはいえ白粥を受け付けない！もうすっかり私は川上村の人間。愛するオカイサンをレポートする。

●オカイサンの作り方

①ホウロクで香ばしく炒った自家製の番茶を、チャンブクロ（茶袋）につめる。瀬戸集落では昔、オカイサンを作る茶葉が少ない時は、芽吹く時分のカシの葉や、カワヤナギの葉で代用したという。昔の人の知恵に敬服。また『ふる里の味を訪ねて』によると「茶炒りは夕方するな」との言い伝えがあるという。

▲　番茶をチャンブクロにつめる

②口を閉じたチャンブクロをよく揉んで、茶葉を砕いておくことが秘訣。

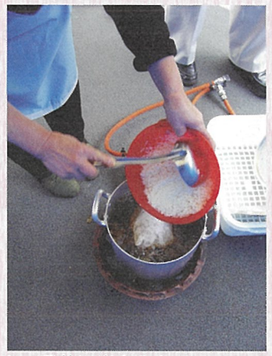
▲　茶葉を砕く

③水をはった鍋にチャンブクロを投入。2合の米を炊くには2:8Lの水が必要。

④点火し、番茶を煮出す。途中、アクを丁寧にとる。

⑤米は1回だけサッと洗う。「茶粥は米の良し悪しで美味しさが違う。上等の米やったらエエゆうわけやのうて、茶粥向きの米がある」。

⑥沸騰したら米を入れる。チャンブクロは取り出す。「茶粥はパッと強火で炊くにゃわ。トロトロの弱火はアカン。塩を入れる家もあるよ」。

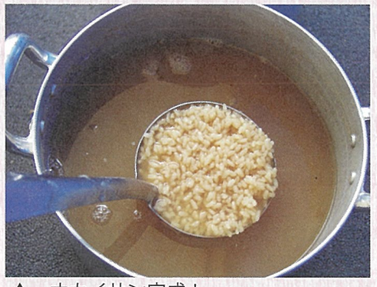


▲　番茶に米を入れる

⑦アクをとる。時々お玉ですくいあげて空気に触れさせるのが裏技。

▲　アクをとる

⑧米が咲かないうちに火から下ろして完成。直前に差し水をして一気に温度を下げる家もある。先日村の方に、オカイサンに焼いたトチ餅を入れるという通な食べ方も教えてもらった。茶粥は冷めても美味しい。「特に夏は冷たい茶粥に限る！」



▲　オカイサン完成！

*今回のレポートは、鹿谷勲氏（奈良県立民俗博物館）に県内の様々な茶粥についてご教授いただいたことが契機になった。お礼申し上げます。

*川上村でも家庭によって「冷や飯で作る」とか「塩を入れる」「茶と米は同時に入れる」など様々なレシピがある。今回は料理上手で評判の辻谷弘子氏にご指導いただいた。

*おすすめ文献

川上村教育委員会 1989『ふる里の味を訪ねて』、鹿谷勲 2006「大和の茶粥（1）」『奈良県立民俗博物館だより』vol32 No1、鹿谷勲 2007「ゴボとゲチャ」『あかい奈良』vol35（有）青垣出版